

「大人は嫌い」「社会は冷たい」。虐待や貧困などさまざまな状況にあるか、または経験のある子どもや若者の多くが話してくれるこの言葉は、重いメッセージだと思っ
ている。あるべき信頼が奪われた状態で成長していくことは、望ましい環境とは言えない。子どもたちの言葉を、これからの社会の在り方を問う道しるべにしていかなければならない。

1月末以降、児童虐待の死亡事件を契機に山陽新聞でも関連する記事が連日見られる。2月25日には、児童養護施設の施設長が刺殺され、元入所者が逮捕されるという事件(同26日付朝刊など)も起こった。子どもに関わるこれらの事件は、私たちに多くのことを投げ

山陽新聞を~~を~~読んで

川崎医療福祉大講師 直島克樹



子どもの支援環境充実を

かけている。

父母の資質、児童相談所や学校の対応の不備、個人の恨みなど事件の原因や問題を個人化することには注意が必要であ

員の多忙さや予算・人も関わらず、いまだに手不足に加え、学校の先生が児童虐待に関する支援について専門的な教育を受けていることはほとんどないという現状が存在している。こうした要因によって、児童養護施設などを退所した人たちへのアフターケアに関し、冒頭に述べた大人や

る。生命が奪われたことは決して許されないが、二つの事件から見えてくるのは、子どもたちや若者を守り、支えていく環境の厳しさでもある。

でも、さまざまな機関は決して許されないが、との十分な連携が難しいことを多くの研究や実践現場がすでに示している。

社会を信用しない子どもたちを支えている人もや若者たちの存在は、そういった社会の在り方も一つの要因であると思えてならない。どうしても支援や

支援に絶対はないの
で、こうすれば生命は救
えたとか、事件は起きな
かったとは言い切れな
い。一方、児童相談所職
度も指摘されているに

のは、児童虐待支援に
おけるシステムやアフ
ターケアに関する課題
は数十年以上前から何
度も指摘されているに

関わりが十分に届かな
い事態が生じるのであ
る。実際、子どもの支
援施設や機関、支援者
自身が孤立し、疲弊し

「山陽新聞を
読んで」は月2回、
日曜日に掲載しま
す。